

「合併地域が栄える」となっていく中心部は栄えなくなっていくを訴えていきます



ふるさととは母 ふるさとはいのち

尾神岳、米山、妙高山、菱ヶ岳など、私はふるさとの山々が大好きです。

今年もまた雪の中で新しい年を迎えました。「カメムシが大発生した年は大雪だ」といわれていますが、そうならないよう願っています。

去年は、私にとって忘れることのできない一年となりました。1月下旬からの豪雪、3月11日の東日本大震災と東京電力福島第一原発の過酷事故の発生、3月12日の長野県北部地震、7月30日の新潟・福島豪雨と災害が続いたからです。これほど災害が続いた年は議員生活のなかで初めてでした。

3月12日、13日と大島区、安塚区の被災現場を訪れた時、「雪の中の地震」の恐ろしさを再認識しました。また、5月16日から3日間、岩手県大槌町などへ行き、支援物資届けと現地視察をした時には、巨大地震と津波の強烈な破壊力に圧倒されました。改めて、災害に強いまちづくりを注がなければならぬと感じました。忘れることのできない一年となったのには、もうひとつあります。国政も市政も大きな転換をしたからです。

「閣」と呼び、庶民的な内閣だという印象をふりまきました。大企業中心、アメリカいいなり度合いはこれまでの内閣の中では最悪です。なかでもTPP（環太平洋連携協定）への参加方針表明は日本の農業、医療、保険などを根本から揺るがすものであり、許すわけにはいきません。

市政も合併から7年目の昨年、大きく舵を切りました。木浦市長時代から続いてきた、「編入合併であつても、気持は新設、対等合併」という市政運営は、地域事業費制度の見直しで崩されました。それだけに合併地域の力を飛躍的に強めていくことが求められています。

私たちが住む上越市は14市町村が合併して8年目に入りました。

12月議会一般質問でものべましたように、「合併地域が栄えることなくして中心部は栄えません」。上越市自治基本条例や中山間地域振興基本条例を頼りにしながら、「市民こそ主人公」の市政実現のため、今年も市民の声、市民の願いをしっかりと市政に届けていきたいと思えます。どうぞよろしくお願います。

市議会議員 橋爪 法一

三〇年以上もお世話になっていられるお店が近くにありません。正確には元お店と言った方がいいのかも知れませんが。工場の手前に小さな事務所があり、そこはお客さんだった人たちや近所の人たちなどの楽しいお茶飲み場になっています。

この間もこの事務所へ行ってきました。窓のそばまで行った時、長年のクセで事務所内の電気がついていっているかどうかをどうも見てしまっています。この日もついていました。ほっとして事務所の入り口まで行くと、左奥にSさんとNさんの姿が見えました。

事務所に行ったのはこの二人と家主のY子さん。そこに私も加わって四人でコーヒとお茶をいただきながら、おしゃべりを楽しみました。何がきっかけだったかは忘れませんが、Sさんがお盆などにどうやって実家へ行ったかが話題となりました。

「おらは石黒から嫁に来たがどね、高柳町の……。はあ、家には歩いて行ったもんだわね。時間が経つのも忘れてさ、とつとつとつと歩いたもんだ」

Sさんは旧石黒村（現柏崎市）の出身。実家へ帰る時のうれしさを思い出したのでしよう、しゃべる言葉には弾んだ調子がありました。「とつとつとつと歩いた」といってもSさんの住まいから石黒までは直線でも一五キロメートルはあります。

「五時間くらいはかかったらね」とたずねたところ、「なして、そんがにかからんこと。田麦（大島区）まで行って、そこからまた一時間も歩けば着いたわね」と言われました。否定はされましたが、山や坂がありますから、まあ、五時間近くはかかったことと思います。もつとも、歩きが中心の時代では、五時間というのは大した時間ではなかったのかも知れません。

SさんとNさんは、すでに夫を亡くしています。二人はお互いの家が五〇メートルくらいしか離れていないこともあって、いつも声を掛け合い、天気が良い時には散歩をしたり、アパートの入口で日向ぼっこをしたりしています。この日もたぶん一緒に歩いて事務所にやってきたのだと思います。

私よりも先に来ていた二人が帰ったあと、Y子さんと話をしていると、今度は同じ町内会のTさんがやってきました。TさんはY子さんとは親戚筋の人です。

水色のベストを着たTさんは私の顔を見るなり、「橋爪さんの車があったすけ、入って来たがだ」と言いました。「よく、おれの車だとわかったねえ」と言うのと、「ナンバー憶えているもん、わかるわね」。昭和ひとケタ生まれの人ですが、記憶力は抜群です。びっくりしました。

Y子さん、Tさん、そして私の三人での話題は犬の散歩でした。TさんとY子さんの連れ合いは猟友会の仲間でもあり、どちらも犬を飼っていました。犬は長く飼っていると「家族の一員」になります。言うまでもなく、犬も人間も年を重ねると体力が落ちていきます。犬が老いた時のエピソードが印象的でした。

「最初は元気に歩いているがさ。それが散歩の帰りになると、へとへとになっちゃって……。最後はだっこして家に連れて行ったもんだこて」

同じ経験されたのでしょうか、Tさんの話にY子さんもうなずいていました。

Y子さんは一昨年、夫を亡くしています。Tさんが帰り、再び私とY子さんだけに合った時、「店やめても、こうしてみんなに寄ってもらうってすごいね」そう声をかけたところ、Y子さんからすぐに言葉が返ってきました。「だって、おらだってさみしいもん」。

柿崎、浦川原両地域協議会でも総合事務所見直して議論



柿崎区と浦川原区の地域協議会を22日、傍聴してきました。私に関心を持ったのは、両区での地域協議会で地域事業や総合事務所の見直し問題が

来的には柿崎区はなくなってしまうのではないかと、「総合事務所の権限が木田庁舎に集中していく気がする。ブロック化をする意味が果たしてあるのか。真綿で首を絞めるようなやり方はいかがなものか」などの声が出ていました。みんな総合事務所の行方を心配しているんですね。

浦川原区でも発言が相次ぎました。「そもそも人間が減っているのは問題だ。その地域に精通している職員がいてもらわないと困る」「地元のことを熟知している人がいることが必要不可欠だ。事務事業を進めるにあたって、職員が減員したままでは対応できない。区出身者を再任用すべきだ」「議員が減ると、こういう問題が十分検討されないでどんどんいってしまうのではないかと」などの意見や質問が出ていました。

（写真は浦川原区地域協議会）



どう議論されるかでした。（写真上は柿崎区地域協議会）
このうち、柿崎区地域協議会では、「事務事業の総ざらい、地域事業費制度の見直しのあとで（仮称）厚生産業建設会館の建設問題が本決まりしてきた。反対してもらいたい。（総合事務所グループのブロック化）については、合併協議の段階ではこんな話はまったくなかった。おかしい話だ。これにも抵抗してもらいたい」、「（総合事務所見直しの方針について）説明するけれども、（我々の声を聞いて）直すつもりはないという話が聞こえてくる。これだとやる気がなくなる」、「職員がこのまま減るのは重大な問題だ。将